



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

名もなき人々、 聖性の衣

1 本日教会は諸聖人の祝日を祝います。主の花嫁である教会は祝祭の衣装をまとい、天のエルサレムの喜びに満ちあふれて神の御前に進み出たいと願っています。花嫁衣装を身にまとった教会は、花むこのととのえた祝宴に赴きます。その衣装は聖性の衣でもあるのです。本日、教会のまとう衣は、幾千ものさまさまな光に照らされて、まばゆく輝いています。「すべての国と民族と民とことばの、おびただしい数えきれぬ(黙示録7・9)男女が発する絶え間ない光の一つ一つが集まって、無数の光の束となって輝いているのです。偉大な人物たちの織りなす歴史は、こうした無数の男女のことを忘れがちです。高価な真珠は謙遜と隠れた生活というベールをかぶっていて表に現れないからです。ただ一人聖なる御方の無尽蔵のたまものを受けた無数の男女は、受けたものを実行に移し、生きるしる

2 こうして私たちの住む町の路のようになかだ具体化していた人々です。上で、この聖性の衣の一端が姿を現わすことがあります。一見、名もなき存在ですが、実際には最も個性的な証しをしているのです。セラフィンたちが絶えず「聖なるもの、聖なるもの、万軍の主(イザヤ6・3)」と称えるあの御方の聖性が、さらに輝きを増すよう努力を傾けつつ生きる、愛すべき兄弟姉妹たちの示す証しなのです。その一人ひとりが小さくともかけがえない光です。各人が自らの使命を持ち、最後の最後まで完全に自分自身であり続けます。創造主がお与えになったすばらしい独自性に従って。こうして、他の兄弟姉妹たちと共に神秘の共同体に結ばれて、彼らはこの世という舞台(時に暗闇ともなることもありすが)を明るく照らします。私たちが希望へと招き、

3 これら聖人たち——私たちのためにより良い世界を築こうと手助けしてくれる兄弟姉妹——に本日の祈りを捧げます。心貧しく、神への信仰において豊かな人は、失望することがあります。すでにこの世に打ち勝っているのですから。苦しむ人は、その涙で人間の苦しみという大河を満たすでしょう。柔和な人は、遅々として労多し正義という道を選んだのです。暴力と権力濫用の道をしりぞけて。義に飢え渴く人は、誠実と忠実のために戦う人です。救すことを知る人々は、敵を愛し、憎む者たちに善を行ないます。心の貧しい人は、常に曇りのない、純真な輝く目で物事を見ています。平和をもたらず人は、兄弟たちの夢を実現させるために自ら代価を払

った人です。義のために迫害された人は、最も小さい者、全てをなくした人々の希望を形にあらわしてみせたのです。神の聖人たち、私たちの兄弟姉妹は、聖性は遠く手の届かぬ所にあるものでも、わずかな特権者のための遺産でもなく、私たち一人ひとりの内にいる新しい人間を満たすものであります。あることを教えてくれます。すべての聖人たちよ、聖性に飢えた現代のために、真の証人に今なお与えられる、生きた希望の歴史のために、玉座にまします小羊に祈りたまえ。

教会とともに、繰り返し祈りましょう。「マラナ・タ、主イエズスよ、来たまえ。」(黙示録22・20)

ヨハネ・パウロ二世 教皇様の声

年間購読者募集中
(1月~12月)

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教皇を伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の脱教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかりやすい日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

■教会でまとめて、お申込みの場合
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご請求ください。

財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎0797-31-3452

練獄の靈魂の ために祈ろう

1 「主よ、もしあなたがここにましましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。(ヨハネ11・21)マルタの言葉は、あの恐ろしい敵つまり「死」に立ち向かうことのできる者は一人としていないのだろうかという、誰もが抱く願いを表明しています。死を前にすると、人間のいかなる企ても無に帰するばかりです。兄弟姉妹の皆さん、亡くなった人々のために祈りましょう。この数日間、私たちは愛する人々の永遠の憩いを願うため、墓地から墓地へ

2 ですからこそ、エルサレムのある園で新しい墓の入り口から石が転がり落ち、突然メッセジがひびき渡り、何千年もの間待ちに待ったことが実現した時、全人類は喜びに湧きました。私は復活であり命である。私を信じる者は死んでも生きる。生きて私を信じる者は永久に死なぬ。(ヨハネ11・25・26) 栄光の主は命への扉を大きく開け

キリスト—— 救い主、預言者

キリストシリーズ ⑦

はなち、私たち全員の中に脈うつ永生と成就と満たされることへの切望に、意味を与えてください。信実なる神は、すべてにおいて人間と等しいものとなられた御子を死からさえもよみがえらせ、私たちに永遠の生命を確信させてくださいまし

今日、死はなおも犠牲性を求め続け、人々は日夜苦しむと悲しみにさいなまれていきます。それでも、心身両面での悪の闇を裂くように、確たる約束が一筋の光となって信じる人々を照らしてくれま。私に復活であり命である」と。この言葉は待ち望む私たちを力づけ、忍耐力を増し、希望を強めてくれるのです。

3 膨大な無数の死者を念頭に置いて、本日教会は生命への信仰を言葉にします。命である御方の名において、「すべての人がアダムによって死ぬように、すべての人はキリストによって生き返る。」(コリン①15・22)

私たちは確信しています。キリストは私たちを愛し、場所を用意してくださいるために行かれたのだ、と。間もなくお戻りになって、永遠の住居に私たちを案内してください。こうして教会は、姉妹や母、すべての時代のあらゆる死者のために今日も復活する御方を証しする人々と共に、地に落ちた麦粒が成長して永遠の生命への豊かな希望の実りをもたらすよう、絶えず祈り続けます。

本日私は、特に敵意と暴力の犠牲となつた人々を思い起こし、全人類の求めている平和を、主がお与えくださるよう祈りたいと思います。

1 ピラトの前で行なわれた取り調べで、あなたは王かと尋ねられたイエズスは、地上的・政治的な意味の王ではないと否定なさいました。しかし二度目に尋ねられた時には、「あなたの言うとおり私は王である。私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世に來た。」(ヨハネ18・37)とお答えになりました。

ここでメシアの王として、そして司祭としての使命が、預言者としての使命の本質の性格とつながり合います。事実、預言者は真理を証言するために遣わされました。そして真理を証言するために、神の御名をもって語ります。ある意味で預言者は神の声であると言うことができます。

イスラエル人のために神から遣わされた預言者の使命は神の御名で語ることでした。

「預言者の性格」が(主の使命)と一致していることは、特に王であり預言者であるダビドの姿のうちに認めることができます。

神と人々に仕える

2 旧約の預言者の歴史がはつきりと語っているように、神の御名をもって語り、真理を宣べ伝えるということは、命令をお与えにな

る神と、神の使者として預言者が語りかける人間への奉仕でした。この預言者の奉仕は(崇高で栄誉あること)でしたが、その反面(困難で苦しいこと)でもありました。エレミアの痛ましい生涯はそのよい例と言えましよう。彼は妨害、拒絶、迫害に遭いました。(真理)を宣言すればするほど、人々からは(受け入れられなかつた)のです。イエズスは時折、預言者たちが受けた苦しみに言及なさいましたが、御自らそれらを体験なさつたのです。

3 預言者の使命が備える司祭的な性格については先に述べてきました。次に神のしもべ(エベツド・ヤウヴェ)の姿について考えてみましょう。これはイザヤの書(正確には「デウテロ・イザヤ書」)に描かれていいます。預言者の性格をはつきりと表わしているこの「ヤウヴェのしもべ」という表現は、同時に司祭として、また王としての特色をはつきりと表わしています。このことを考えれば、旧約のメシアの伝承がこの主のしもべの姿のうちに豊かに意味深く表現されていることに気づきます。イザヤの書に記された(しもべの歌)は、旧約のメシア観を総合したものです。それはまた、将来発展する可能性を残したものです。キリ

ストよりずっと以前に書かれたものであるにもかかわらず、(ヤウヴェー苦しむしもべ)の描写を見れば、それがキリストを指していることはすぐにわかります。その描写は実に正確忠実で、キリストの受難をもとに描かれたかと思えるほどです。

4 「しもべ」神のしもべ」という言葉は旧約聖書に広く使われています。数多くの崇高な人物が(主のしもべ)と呼ばれ、またそのように認められてきました。たとえばアブラハム(創世26・26)、ヤコブ(創世32・11)、モーゼ、ダビド、ソロモン、預言者たちなどです。またナブコドノゾル(エレミア25・8)やキロ(イザヤ44・26)のようなイスラエルの歴史においてそれぞれの役割を果たした異教徒にもこの呼び名が与えられています。そして全イスラエルも一つの民として(主のしもべ)と呼ばれています。(イザヤ41・8)「9、42・19、44・21、48・20参照)「主は、しもべイスラエルを助けられました(ルカー1・54)と聖母マリアが神を賛美するマニフィカトの中にもこの表現が見られます。

5 しかしイザヤ書にある(しもべの歌)について言えば、イザヤがはつきり罪人イスラエルと区別していますが、これは一つの民といたった集合的なものではなく、一人の人間を表わしています。第一の歌は次のように語っています。「私の支えるしもべ、私の心を喜ばせる、選ばれた者、私は彼のうちに霊を置き、異国に公正を宣言させる。彼は叫ばず、声を立てず、広場で話を聞かせない。彼は折れかけたあしを折

らず、弱い炎の灯芯を消さず、(…)弱らず、くじけず、この世に公正を立てるときまで。(イザヤ42・1-4)「主なる私は(…)民の契約と定め、異国の光とした。おまえは盲人の目を開き、囚人を牢から出し、闇に住む者を獄から出す。(イザヤ42・6-7)

6 第二の歌も同じ内容を展開していきます。「鳥々よ、聞け、遠いところのもろもろの民よ、心せよ、主は母のふところから私を呼び、母のふところから私の名を記憶された。彼は私の口を鋭い剣のようにし、御手のかけに隠し、私をとがった矢とし、えびらにさし……(イザヤ49・1-2)「こう仰せられた『おまえがヤコブ族を立て直し(…)私のしもべとされるのは、あまりにもささいなことすぎる。私は、おまえを国々の光とし、地の果てまで救いをもって行かせよう。』(イザヤ49・6)「落胆する者を一言で支えられるように、主なる神は私に弟子の舌を与えられた。(イザヤ50・4)「多くの民は驚き、王たちは、彼の前に口を閉じる。(イザヤ52・15)「正しいしもべは、その苦しみによって多くの人々を義とし、その罪をみずから背負う。(イザヤ53・11)

7 あとにあげた三つの引用は、第三と第四の歌からのものですが、これは極めて現実に(苦しむしもべ)の姿を表わしています。この苦しむしもべについては後に述べようと思ひます。驚くべきことですが、イザヤはイエズスの御生涯のはじめに聖なる老人シメオンが預言したすべてのことを、すでに預言し

た。第二の歌も同じ内容を展開していきます。「鳥々よ、聞け、遠いところのもろもろの民よ、心せよ、主は母のふところから私を呼び、母のふところから私の名を記憶された。彼は私の口を鋭い剣のようにし、御手のかけに隠し、私をとがった矢とし、えびらにさし……(イザヤ49・1-2)「こう仰せられた『おまえがヤコブ族を立て直し(…)私のしもべとされるのは、あまりにもささいなことすぎる。私は、おまえを国々の光とし、地の果てまで救いをもって行かせよう。』(イザヤ49・6)「落胆する者を一言で支えられるように、主なる神は私に弟子の舌を与えられた。(イザヤ50・4)「多くの民は驚き、王たちは、彼の前に口を閉じる。(イザヤ52・15)「正しいしもべは、その苦しみによって多くの人々を義とし、その罪をみずから背負う。(イザヤ53・11)

説教・講話・書簡等の抄訳

ていたのです。シメオンはイエズスを「異邦人を照らす光」として、また同時に「逆らいのしるし」として挨拶しました。(ルカ2・32〜34参照) イザヤの書を読むうちに、真理を証明するためこの世に来たにもかかわらず、まさにその「真理のために人々から拒まれ、死によって「多くの人の義のもととなられた預言者としてのメシアの姿が浮かんできます。新約聖書には、イエズスのメシアとしてのお働きの始めから、いたるところでヤーヴェー主のしもべの歌が繰り返されています。ヨルダン川での洗礼の場面は、イザヤの書と並行して次のように展開します。まずマテオが記しています。「イエズスは洗礼を受けられた。(…)すると天が開け、神の霊が鳩の形で彼の上を下るのを見た。(マテオ3・16) 一方イザヤはこう語ります。「私は彼のうちに霊を置いた。(イザヤ42・1) そしてマテオがつけ加えて、「天から『これは私が喜びとするいとし子である』と言う声がした。(マテオ3・17) そしてイザヤは、神がしもべに「私の心を喜ばせる選ばれた者(イザヤ42・1)と仰せになった」と記されています。ヨルダン川に近づいて来られるイエズスを指して洗礼者ヨハネは、「世の罪を取り除く神の小羊を見よ。(ヨハネ1・29)と叫びますが、これは苦しむヤーヴェーしもべの第三と第四の歌を一言で言い尽くす歓喜の叫びです。

ナザレトの会堂でイエズスがお話になった最初のメシアとしての御言葉が記されていますが、そこでも同様のことが見られます。イエズスはイザヤの書をお読みになりました。「主の霊は私の上にある。私に油を注いで聖別されたからである。霊は、貧しい人々に良い便りをもたらす、捕われ人に解放を、盲人に見えることを告げ、しいたげられた人に自由を返し、主の恩寵の年をのべ伝えるために、私を遣わされた。ルカ4・17〜19) これは主のしもべの第一の歌にあるとおりです。(イザヤ42・1〜7, 61・1〜2参照) イエズスの御生涯とその御働きを見れば、イエズスがまさに神のしもべとして私たちの目に映ります。人々に救いをもたらす御方、人々を癒す御方、人々を罪から解放される御方、力によってではなく、善によって人々を御自分のもとにお集めになる御方です。福音書、特にマテオの福音書には、よくイザヤの書が引用されていますが、マテオが記すように、イザヤの預言はキリストのうちに実現したのです。「夕暮れ時になると、人々が悪魔つきを大ぜい連れてきたので、一言で悪魔を追い出し、病人を治された。こうして預言者イザヤのことは実現した、『彼はわれわれのわずらいを取り去り、われわれの病気を背負った。』(マテオ8・16〜17, イザヤ53・4参照) また次のようにも記されています。「多くの人がイエズスについてきたので、イエズスはその人々たちをみな治した。(…)こうして預言者イザヤの預言は実現した。『私の選んだしもべ、私の喜びとする愛する者、私は彼の上に霊をおこう。(…)』(マテオ12・15〜21) そしてこのあとに主のしもべの第一の歌が続きます。

福音書と同様に使徒行録も伝えています。キリストの十二人の弟子からはじまる初代の弟子たちは、預言者イザヤがその霊に満ちた歌の中で預言したすべてのことがイエズスのうちに実現したことを確信しました。すなわちイエズスが選ばれた神のしもべであること(使徒行録3・13, 26, 4・27, 30, ペトロ2・22〜25)、ヤーヴェーのしもべの使命を実現し、新しい律法をもたらされたこと、すべての国々の光となられたことを確信したのです。(使徒行録13・46〜47) この同じ確信は、のちに「ディダケー」(使徒の教え)や「聖ポリカルポ殉教録」、

ローマの聖クレメントの第一の手紙に見つけることができます。ここでとても重要なことをつけ加えねばなりません。イエズスがイザヤの書53章に言及して、御自らしもべであると仰せになったことです。「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるためであり、多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである。(マルコ10・45, マテオ20・28) 弟子の足を洗ったときも同じ考えをお示しになりました。(ヨハネ13・3〜4, 12〜15) 新約聖書全体にわたって、しもべの召し出し、人々の解放、治癒、契約という預言者の使命を強調するヤー

ヴェーのしもべの第一の歌への言及があります。それと同時に、実に多くのテキストが、苦しむしもべの第三と第四の歌(イザヤ50・4, 11, 52・13〜53・12)を引用しています。同じことがフィリッピン人への手紙に出てきます。聖パウロはキリストを賛美する歌を歌って次のように要約しています。「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。(…)死ぬまで(…)自分を卑しくして従われた。(フィリッピン2・6〜8) (八七・二・二十五)

教会の教えと

神学者の意見



夫婦の直面する問題の一つが責任ある出産を危険にさらす種々の困難にあることはよく知られています。(『現代世界憲章』51) 公會議は、生命の伝達に関する神の掟と真正な夫婦愛との間に矛盾なしという真理を、諸問題を正しく解決するための基本であると信じています。諸価値(善)が互いに衝突するから双方をはかりにかけていずれかを選ばねばならぬと考え、実際に一方を選んで他方を捨てるのであれば、それは道徳的に大間違いです。そんなことをすれば、夫婦の良心を混乱させてしまいます。夫婦はキリストの恩寵

を受けて、夫婦愛に関わる掟を完全に果たすことができるのです。(…)いくつかの困難があります。第一の最も重大な問題は、キリスト者の間にささる教会の教える真理そのものに疑いをかける意見が多あつたし、今もあるという点です。避妊や産児制限などについての教会の教えは、第二ヴァティカン公會議の諸文書と、回勅『マーネ・ヴィテ』および『家庭について』、さらに『生命のたまもの』のなかで明確に説明してあります。従って司牧者や神学者には重大な責任があります。神法や教会の教えと矛盾することを

教える人は、夫婦を誤れる道に導くことになるのです。避妊などについての教会の教えは、神学者たちが自由に討議すべき問題ではありません。神学者が教会の教えに反することを説くようなことがあれば、夫婦の良心を誤らせてしまうのです。第二の困難は、キリストの教えが真理であることは認めるけれども少なくともある状況においては実行不可能だとする考えです。教会の聖伝が絶えず教えてきたように神が不可能なことをお命じになるはずのないこと、また、掟の一つひとつには恩寵が伴い、神は人間が掟を果たすのを助けてくださること、このことをしっかりと明記していなければなりません。それと同時に、夫婦はしばしば秘跡にあずかり、貞潔を保つ努力を重ね、絶えず祈る必要のあることを決して忘れないで欲しいと思います。(八七・六・五)

不変の教え

大天使聖ミカエル

戦いにおいて我らを守り給え

ベトロの座にあった前任者が、
そうであったように私も、この
聖所固有の雰囲気、つまり沈黙と
祈りと悔い改めの雰囲気、ひとと
き楽しみ味わいたいとやって参りま
した。妥協や順応に流されない真正
のキリスト教の証人となるのが困難
な今、大天使聖ミカエルをあがめ、
大天使に聖なる教会を守ってくださ
るよう祈り願うために。

教皇セラツィウス一世は、四九三
年に、聖ミカエルの出現した洞窟を
祈りの場として奉獻することに同意
し、初めてここを訪れて「天使の赦
し」という免償を許可されました。
それ以来、アガピトウス一世、レオ
九世、ウルバヌス二世、イノケンテ
ィウス二世、チエレスティヌス三
世などの教皇方が次々とそのあとに
続き、この聖地に光栄を帰されたの
です。また大勢の聖人もここを訪
れ、力と慰めを得ました。たとえば
聖ベルナルド、モンテベルジネ大修
道院の創立者聖ウィリアム、聖トマ
ス・アクイナス、シエナの聖カタリ
ナなど。当地訪問者の中で有名にな
り、今なお著名な一人がアシジの聖
フランシスコです。聖人は一二二一
年、四旬節の準備のためにここを訪
れました。自分がこの聖なる洞窟に
入るのはふさわしくないと考えて、
入口でとどまり、石の上に十字架の

しるしを彫ったと伝えられています。
このような光輝ある謙遜な巡礼者
の群れは、生き生きとした流れのこ
とくあとを絶たず、中世初期から今
日に至るまで、この聖地を祈りとキ
リスト教信仰の再確認の場としてき
ました。これはとりもなおさず、新
旧両約聖書の幾多のページの中で主
役をつとめる大天使ミカエルの姿に
人々がどれほど深く感じ入り、祈り
願っているか、また、教会が大天使
の天よりの保護をどれほど必要とし
てきたかを示しています。聖書には
ミカエルが悪魔の頭である竜と戦う
偉大な戦士として描かれています。
「そうして天に戦いが始まった。ミカ
エルとその使いたちと竜と戦い、
竜とその使いたちも戦ったが、しか
し竜は負けて、天に彼らのいるところ
がなくなつた。大きな竜、すなわ
ち悪魔またはサタンと呼ばれ全世界
を迷わす——あの昔のへびは地上に
倒され、その使いたちもともに倒さ
れた。」(黙示録12・7-9) この劇
的な描写を用いて、聖なる著者は「神
のように」なりたいたいという野望にそ
そのかされた最初の天使の墮落を示
しました。大天使ミカエルの名前は
ヘブライ語で「誰が神のようである
うか」という意味です。それゆえ大
天使の振舞は、神が唯一であること、
および神は侵すことのできない御方

であることを教えているのです。
断片的ではありませんが、啓示
が与える証拠は聖ミカエルの
個性と任務についてまことに雄弁に
語っています。聖ミカエルは大天使
で(ユダ1・9)、神の権利は奪うこ
とができないと確言しています。彼
は天国の王子の一人であり(ダニエ
ル12・1参照)選ばれた民の守護を
託されてきました。そしてこの選民
から救い主が生まれるのです。今や
神の新しい民が教会です。そしてこ
れこそ、教会が地上の神の王国を守
り、発展させるための戦いにおいて

の不正から教会を守り、「吠えるしし
のように食い荒すものを深す」(ペト
ロ①5・8)悪魔と戦う信者を助け
るのです。
大天使ミカエルの特徴を表わすこ
の悪魔との戦いは未だ続いています。
悪魔は未だ生きていて、この世で働
いているからです。実際、この世の
悪、社会にみる無秩序、人間の背信、
人間が犠牲となる内部分裂などは、
原罪の結果であるばかりでなく、闇
にかくれて出没するサタン、人間の
道徳面での均衡を破壊する者の働き
の結果でもあるのです。聖パウロは



聖ミカエルこそ守護者、支えである
と考える理由であります。主が保証
なさつたように、「地獄の門もこれに
勝てぬ」(マテオ16・18)ことは真実
です。しかし、悪魔の畏や試練との
戦いから私たちが免れているという
意味ではありません。
この戦いの中で、大天使ミカエルの
は教会の側に立って各時代のすべて

のしかける数々の民についてキリス
ト信者に警告するのはこのためです。
使徒はエフェソの住民に次のように
勧告しています。「悪魔の企てに刃
向かうために神の武具をすべてつけ
よ。私たちが戦うのは血肉ではなく、
権勢と能力、この世の闇の支配者、
天界の悪霊だからである。」(エフェソ
6・11-12)
大天使聖ミカエルの姿をみると、
この戦いが思い出されます。東方・
西方教会とも、この戦う大天使に特
別の信心をもつてやみませんでした。
御存じのように、大天使聖ミカエル
に奉獻された最初の聖堂はコンスタ
ンチヌスによるもので、コンスタン
チノープルに建立されました。それ
が有名な「ミケリオン」です。これに
引き続き、あの新しい帝国の首府で
は、おびただしい数の教会が大天使
に奉獻されたわけです。西方におい
ては五世紀から聖ミカエル礼賛が、
ローマ、ミラノ、ピアチェンツァ、
ジェノア、ベニスなど、多くの街に
拡がりましたが、これら遺跡の中で
最も有名なものは、もちろんモンテ
・ガルガーノにあるこの聖堂です。
一〇七六年にコンスタンチノープ
ルで鑄造されたブロンズの扉には、
大天使が地獄の竜を征服するところ
が描かれています。これは芸術が私
たちに表示し、典礼が大天使に祈り
願う心をかき立てるシンボルです。
どなたも、昔、御ミサの後で唱える
習慣だったあの祈りを思い出される
ことでしょう。「大天使聖ミカエル、
戦いにおいて我らを守り給え(…)」。
私は全教会の名において、この祈り
を唱えます。(八七・五・二十四)

サタンをためらうことなく、「この世
の神」(コリント②4・4)と呼んで
います。これによって、サタンが、
私たちの行動に取り入り、見たとこ
ろ人間の本能の欲望に適合している
ように、実は破滅的な逸脱へと
手引きする、抜け目のない魔法使い
であることを示しています。異邦人
の使徒が悪魔とその無数の家来たち

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしに
そのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二下部以上の一括購入なら送料不要
郵便替 振替 3-72393